

大震災を経験された方々から学ぶ

～私たちのこれからの暮らしについて考えよう

その2 食生活について 第3報～

三重大学教育学部附属中学校

教諭 吉岡 良江

I はじめに

中学校家庭科では、「生活の主体者として自立すること。家族をはじめとする他者とともに、生活課題の改善や解決に取り組むこと。明日の生活環境・文化をつくることのできる資質・能力を育むこと。」を目標に据えている。これは、ESD の理念との親和性が非常に高いものであり、東日本大震災を機に、より現実味を帯びたものとしてこれらの資質・能力の育成が求められるようになってきたように感じている。多くのいのちが失われた未曾有の出来事を教訓として、将来をも見据えた上で自分の暮らしを見つめ直すことは、今を生きる私たちにとっての義務であり、「すべての人々の安全を確保すること」「すべての人々が安心して心豊かに生活できること」それを保障できる力の育成は、必須の課題であると言えよう。

このような想いのもと、ここ数年、被災地での生活に注目した取組を進めてきた。一昨年からは、特に「被災地の食」にスポットをあて、「災害時における調理の現状を知ること、被災地の復興に向けて自分たちができることを考え行動するとともに、自分の食生活を見直し、持続可能な社会の構築に向けて環境に配慮した食生活を工夫し、実践することができること」をめざし、試行錯誤を繰り返しながらさまざまな授業を試みてきている。

被災地において食を整えることがいかに大切であるのか、また、今後起り得ると予想されている自然災害に備えて、さまざまな準備を進めていくことの必要性については、年次を追うごとに、より多くの生徒が気づけるようになったと感じている。また、ジグソー法の導入等、指導方法の見直し・改善を試みたことは、生徒の「主体的に課題に向き合う力」の育成に少なからず効果があったと感じている。

しかしながら、「非常時であり致し方のないことかもしれないが、被災地であっても、環境保全に係る問題にまで踏み込んで、どのような生活を送るべきか考える必要があるのではないか」等持続可能性を鑑みた気づきについては、一部の生徒による気づきで終わってしまっている。

そこで本年度については、「これらの気づきを全体で共有するとともに、そこでの気づきや想いに基づいた体験活動を効果的に導入することにより、持続可能性をも鑑みた主体的な生活者は自ずと育つであろう。」このように仮説を立て、実践を試みることにした。

次にその概要を紹介する。

II 実践の概要

1 対象

M 大学教育学部附属中学校 3 年生 144 名を対象とした。

2 時期

平成 29 年 11 月から平成 30 年 2 月にかけて実施した。

3 ねらい

<教科としてのねらい>

災害時における調理の現状を知ることで、被災地の復興に向けて自分たちができることを考え行動するとともに、自分の食生活を見直し、持続可能な社会の構築に向けて環境に配慮した食生活を工夫し、実践することができる。

<ESD としてのねらい>

○リスクマネジメントの視点で、これからの暮らしを考えることにより、短期的には不利益を被っても、長期的にみて、持続可能な社会の実現に向けて主体的に取り組む態度を育成する。

○さまざまな問題解決のために、仲間をはじめとする多様な他者と話し合える力及びよりよい解決等を探る態度を育成する。

○さまざまな問題解決のために仲間をはじめとする他者の多様な考えを聴き、自己の考えや価値観をより豊かなものにすることができる。

4 指導計画（全 7 時間）

第 1 次 昨年度実施した調理実習を振り返ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間

第 2 次 改めて自分たちができることを考えよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 時間

（避難所の実際を学ぼう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 時間）

（炊き出し実習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 時間）

第 3 次 2 年生へのアドバイス-レポート作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間

5 実践の概要

(1) 「災害時の食」についての学びの経緯・・・1・2 年次の取組について

[食生活と自立]に関する基礎的・基本的な知識及び技術については、概ね身につけていると判断した上で、「災害時の食」に注目した実践を次のように行った。

<1 年次>

ガスの使用が十分ではない状況下での調理について考えた。保温カバー等の活用によりガスの使用を抑えた調理が可能になること、また、被災地では調理のための施設・環境を十分に整えることは難しいが、「五感でおいしさが感じ取れる」食は心身の健康を考える上で重要になること、その中でも温かく食することは心の安寧を保つ上で非常に重要であることについて、体験的活動も取り入れながら学んだ。

<2 年次>

水の使用が十分ではない状況下での調理について考えた。また限られた水量で実際

に調理を行った。この実践からは、大半の生徒が、限られた水量での調理の難しさを実感するとともに、被災地において食を整えることの大切さについて、また、今後に備えてさまざまな準備を行うことの必要性について気づくことができた。

(2) 本実践について

①学習課題の設定について

学んだ知識やスキルを応用・活用し、主体的に課題の解決に向けて取り組んでいける力を育成するためには、日常生活の中に存在する「解決せざるを得ない課題」を学習課題として設定すること・教科の本質に迫る探究の学びを実現させること、それによる転移可能な概念の理解が必須となると考える。

そこで本実践においては、「本質的な問い（＝教科の本質に迫る論争的で探究を触発する問い）」、「永続的理解（＝教科の本質・概念。転移可能な概念と複雑なプロセスを使いこなすことによって得られる理解）」、「パフォーマンス課題（＝学んだ知識やスキルを応用して実践したり表現したりすることを求めるような、複雑で総合的な課題）」を次のように設定することとした。

【本質的な問い】

調理を行うにあたり、大切なことは何か？

【永続的理解】

調理する上で最も大切なことは、食品や調理器具等の安全と衛生に留意した管理について理解し、適切に実践できることである。それを保障することは、環境に配慮した消費生活の実現・持続可能な社会の構築にも通ずるものであり、日常の生活においても、また災害時においても同様に言えることである。

【パフォーマンス課題】

昨年取り組んだ「災害時を想定した調理(水の使用に制限がある中でのシチュー作り)」を今年も2年生が3学期に行います。よりよい実習となるように、「3年生からの声」として、ポイントになることをレポートにまとめなさい。

②本実践における学びの姿

i 第1次

生徒らは昨年度、大震災を想定し、提示された4つの資料を基にして、調理に使用可能な水量を仲間との協働により算出し、実際にシチューを調理している。そこで提示した資料は「調理準備の場面、実際に調理する場面、調理の後片付けを行う場面、生活全般」の4場面における必要な水量について記したものであった。同一資料を用いた上で、それらを根拠に最終的にどの場面でどれだけの水を使用するかは、各グループの意思によって決定されるものであったことから、グループによって、場面ごとに必要とする水量は異なる結果となった。また、ゴム手袋の使用等により、洗い物に充てる水量の軽減に努めたグループ、そこに重きを置くがゆえに大量のゴミを排出してしまう結果となったグループ等、与えられた水の運用方法に加え、工夫の仕方も多様となった。

災害時という究極の場面を設定しているが、ここでの重要点（＝永続的理解）は平常時

においても重要となる。

そのようなことも含めて、調理の経験者として「2年生へのアドバイスをレポートにまとめる」という形で、表現させることを最終目標として示した。

第1次では、まずKJ法を取り入れることで、「昨年度の取組の成果と課題」として個々に考えたことを全体での共有につなげた。またその上で、被災地熊本における生活ゴミの問題等多くの生徒が気にとめることもなかった部分にスポットをあてた資料を提示し、再度の自己思考を促した。なお、ここで用いた資料については、教育学部家政教育講座吉本敏子先生並びに教職実践演習を履修する4年生の学生数名による支援により作成したものである。

ii 第2次

大学防災室の支援を得て、飯田昌美室長にご指導いただきながら、避難所運営を疑似的に体験する場を設けた。また、教育学部家政教育講座磯部由香先生・平島まどか先生にご助言いただきながら被災地での炊き出しを想定した調理（伊賀地方の郷土料理であるのっぺい汁とビニール袋を用いての炊飯）を行った。

iii 第3次

一連の学びの集大成として、2年生へのアドバイスをレポートにまとめた。個々のレポートは生徒の承諾を得た上で、2年生に紹介した。

6 まとめと課題

「実践後の反省を何とか次年度の実践につなげたい」そのような想いでここ数年継続して取り組んできた実践の総まとめとして位置付けた本年度の実践は、多くの方々の協力と支援によって実施することができた。持続可能性をも鑑みたレベルにまで思考が高まることをめざした学習課題を設定することは大変難しいことであった。まだまだ改善の余地はある。「持続可能性を鑑みた気づきを行動につなげることができる」それを次の目標に据えて、引き続き検討を重ねていきたい。

<参考文献>

- ・秋吉澄子・小野要,平成 28 年度熊本地震における益城町での炊き出し活動に参加して,尚絅大学研究紀要自然科学編第 49 号,2017
- ・秋田喜代美編,対話が生まれる教室,教育開発研究所,平成 26 年 9 月 18 日
- ・秋田喜代美・藤江康彦,授業研究と学習過程,財団法人放送大学教育振興会,2010.3
- ・安彦忠彦,これからの家庭科教育に期待すること-子どもの自立に焦点化して-,日本家庭科教育学会第 60 回大会シンポジウム基調講演資料,2017
- ・荒井紀子,「21 世紀型家庭科カリキュラムの構想」家庭科の授業開発における子どもの学びの視点,日本家庭科教育学会セミナー2000,2000.3.28
- ・安東茂樹,人を育て文化を築く学び,第 56 回全日本中学校技術・家庭科研究大会講演資料,2017 年 10 月
- ・一般社団法人日本家政学会編,炊き出し衛生マニュアル,一般社団法人日本家政学会,2014 年 3 月
- ・一般社団法人日本家政学会編,家政学からの提言震災にそなえて,一般社団法人日本家政

学会, 2012 年

- ・ エリザベス＝バークレイ・パトリシア＝クロス・クレア＝メジャー, 同学習の技法大学教育の手引き, ナカニシヤ出版, 2015.5
- ・ 鯨岡峻崇, エピソード記述入門―実践と質的研究のために, 東京大学出版会, 2005.8
- ・ 国立教育政策研究所.(2013).学校における持続可能な発展のための教育 (E S D) に関する研究最終報告書.国立教育政策研究所.
- ・ ジョージ＝ジェイコブズ・マイケル＝パワー・ロー＝ワン＝イン, 先生のためのアイデアブック- 協同学習の基本原則とテクニック-, 日本協同教育学会, 2014.8
- ・ 消費生活思想の展開,税務経理協会,平成 17 年
- ・ 末川和代・天野晴子, 中学校家庭科消費生活領域における防災学習の検討, 第 37 回日本消費者教育学会発表資料, 2017 年 10 月
- ・ 田中 重好・船橋 晴敏・正村 俊之.(2013).東日本大震災と社会学.ミネルヴァ書房.
- ・ 特定非営利活動法人キャンパー・一般社団法人日本調理科学会,災害時炊き出しマニュアル,東京法規出版,2012 年
- ・ 新潟大学地域連携フードサイエンス・センター編, これからの非常食・災害食に求められるもの-災害からの教訓に学ぶ-, 光琳, 平成 18 年 6 月
- ・ 新潟大学地域連携フードサイエンス・センター編, これからの非常食・災害食に求められるもの 2-災害時に必要な食の確保-, 光琳, 平成 20 年 5 月
- ・ 西岡加名恵編著, 逆引き設計で確かな学力を保障する, 明示図書, 2017 年 3 月
- yosio・日本家庭科教育学会.(2013).第 56 回大会 研究発表要旨集.
- ・ 日本家庭科教育学会, 生きる力をそなえた子どもたち それは家庭科教育から, 学文社,2013.6
- ・ 日本家庭科教育学会中国地区会編, アクティブラーニングを活かした家庭科の授業開発「深い学び」に向けて, 教育図書, 2017
- ・ 日本家庭科教育学会北陸地区家庭科カリキュラム研究会, 「生活主体を育む家庭科カリキュラムの理論と実践,2003.6
- ・ 日本調理科学会・特定非営利活動法人キャンパー, 「僕たちの使い方マニュアル<2007 年版>」
- ・ 波多野誼余夫・稲垣佳世子, 発達と教育における内発的動機づけ, 明示図書, 1971
- ・ Fredricks.J.A.,Blumenfeld.P.C.& Paris,A.H.school engagement : Potential of the evidence. Review of Educational Research, 2004
- ・ 松下佳代, ディープ・アクティブラーニング, 勁草書房, 2015
- ・ 望月 一枝・日景 弥生・長澤由喜子.(2014).東日本大震災と家庭科.ドメス出版
- ・ 文部科学省.(2008).中学校学習指導要領.文部科学省.
- ・ 吉本敏子, 「質の高い体験学習をめざして」家庭科教育 75 巻 9 号,家政教育社,2001 年

